

# 伝九条兼実筆六半切『古今和歌集』の性格

立石大樹

はじめに

九条兼実を伝称筆者とする『古今和歌集』といえば、まず中山切が著名である。中山切は鎌倉中期ごろの書写と見られる。本稿では、『古筆学大成 四』<sup>〔1〕</sup>で小松氏が（一）と分類したものを取り上げてみたい（以下、兼実筆切と略称する）。

書写年代は鎌倉中期頃のものともみられる。伝称筆者は九条兼実だが、確証はない。以下、僅かな断簡数だが、その性格についてまとめてみたい。

## 一 兼実筆切について

兼実筆切については、『古今和歌集成立論』で、久曾神氏が、「系

統未詳」として紹介している。また、小松氏も『古筆学大成 四』の解題で、「いま、にわかには、その伝本系統を明らかにすることはできない。」とされる。

その後、幾つかツレの断簡が増えたので、現段階での整理を試みたい。以下に、管見に入ったツレを一覧にして掲げる。<sup>〔2〕</sup>

断簡番号	巻・部立	書写内容	所在
1	十二・恋歌二	564 569	『古筆学大成』
2	十五・恋歌五	795 798	
3	十六・哀傷	829 830	
4		885 詞書途中 887	
5	十七・雑歌上	902 和歌 903	『古筆学大成』
6	十八・雑歌下	968 詞書途中 969 作者名	『平成新修古筆資料集』
7		1000	『古筆学大成』

以上、七葉が管見に入った。いずれも巻の後半部で、上下二冊本のうち、上巻部は早くに散逸し、下巻部分が切斷されたかと思われる。僅かな中ではあるが、流布本の定家本に対する歌の配列などの形態的な相違などは確認されない。

以下、本文に立ち入って考察してみたい。

## 二 作者名表記について

僅かだが、作者名表記を諸本と照らし合わせてみる。

八三〇番歌に兼実筆切は「素性法師」の作者名を持つ。この位置に作者名を持たないのは本阿弥切・元永本・公任筆本・永暦本・前田家本・天理本・後鳥羽院筆本・伏見宮本などである。定家本ほかの諸本は素性の作者名を持ち、有無をめぐって揺れている箇所である。

八八五番歌の兼実筆切の作者名表記は「尼教信因香朝臣母」とある。「尼教信」は「尼敬信」の誤写かと思う。一致するものはなく独自だが、公任筆本が「尼敬信よるかの朝臣母」、元永本が「因香朝臣母」とある。定家本ほかは「あま敬信」とあって「因香朝臣母」はない。公任筆本や元永本が近い。

五六八番歌に、兼実筆切は「をなし人」と前歌の藤原興風の

歌だとわざわざ記している。諸本は勅撰和歌集の作者名表記のルールに従って、いずれもこの箇所には作者名表記を持たない。これは、兼実筆切が十分に整理されない形を保っているとしておくべきであろう。

七九七番歌に兼実筆本は作者名を持たないが、定家本は「こまち」とある。また、関戸本・寛親本は「小野小町」とあるが、その他諸本は兼実筆本に一致している。この歌に小町と作者名を持つ方が少数であり、兼実筆切の誤脱ではなく、無い本もかつては多くあったとみるべきだろう。

## 三 本文について

一例として、前掲断簡番号6の翻刻を掲げ本文の特徴をみてみたい。

はせたまひける御返事

たてまつりける

伊勢

ひさかたのなかにそひたるさとなれば

ひかりをのみそたのむへらなる

きのとしさたかあはのかみにまかり

ける餞せんとてへふいひつかは

したりけるにこ、かしこにまかり

ありきてよるまでまうてこそ

りければよみてつかはしける

業平朝臣 或本

卷第十八・雑下の九六八番歌から九六九番歌の作者名までである。併せて、所藏者の田中登<sup>3</sup>氏の解説を引用してみたい（傍線は私）。

本本は極めて特異で、通行の定家本と比較してかなりの異同が認められる。一行目「たまひける」は定家本「たまへりける」で、断簡と一致するのは元永本のみ。六行目の「あのかみ」も定家本「あはのすけ」で、これまた元永本とのみ一致を示す。その他四行目「そひたる」、七〇八行目「つかはしたりけるに」、九行目「よるまで」、九〇一〇行目「まうてこそり」などおも独自異文となっており、断簡がいかに特殊な本文を有しているか知られよう。

このように、兼実筆切が一葉見ただけでも定家本とは異なった本文を有していることが知られる。なお、一〇行目「よみてつかはしける」も定家本が「つかはしける」となっていて対立している。この箇所は、本阿弥切・志香須賀文庫本・基俊本・元

永本・公任筆本・雅俗山莊本・寛親本・永治本・前田家本・天理図書館本・伏見宮本・雅経本・建久二年本・高野切など多くの平安朝に行われていたとみられる本文に一致している。

以上から、兼実筆切が定家本成立よりも遡る本文を有していることが確認される。なお、この断簡番号6では、元永本とのみ一致する箇所が二箇所見られることを考えれば、元永本系統に近いものかとも思われる。しかし、ツレを見るに元永本と対立する箇所もまま存在する。また、兼実筆切は独自異文も多い。よって、まず、兼実筆切全体を諸本と比較してみたい。

（断簡番号1）五六〇番歌―五六九番歌

かはのせになひくたまのみかくれて  
人にしられぬ恋もするかな  
かきくらしふるしら雪のしきたへに  
たえすもの思ふ心もあるかな

興風

君こふるなみたのどこにみちぬれは  
みをつくしとそ我はなりぬる

をなし人

死ぬるいのちいきもやすると心みむ  
たまのをはかりあひみてしかな

わひぬれはしひてわすれんと思へとも

ゆめてふもの□人にたのめなる

四行目「たえすもの思ふ」は、定家本はじめ諸本「きえて物思」であり、独自異文である。また、「心にもあるかな」は六条家本が一致する以外、諸本「ころにもあるかな」である。確かに「しら雪」が詠み込まれているので、定家本など諸本のように「きえて物思」の方がよいようにも考えられるが、兼実筆切で解釈してみると、

空があたり一面を暗くして降る白雪が下に（降り積もつて一面に）敷かれているように、絶えることなく（あなたへの）物思いをする心であることよ

となろうか。解釈上は問題ないように思われる。誤写とは言い切ってはしまえないように考えられる。ただし、断簡の独自箇所である。

七行目「我はなりぬる」は、定家本は「我はなりける」とある。断簡は、本阿弥切・志賀須香文庫本・基俊本・元永本・雅俗山莊本・雅経本・今城切など多くの平安朝に行われている本文に一致しており本文としては古体を示しているとみられる。

同じように九行目「心みむ」も定家本では「心見に」だが、断簡は平安朝に行われていた多くに一致する。

一〇行目「あひみてしかな」は、基俊本・今城切・雅経本が「あはていはなむ」、その他定家本などは「いはむといはなむ」であり、独自異文である。ただし、『興風集』における本文や『古今和歌六帖』の本文に兼実筆切に一致している。この本文も十分、当時は普通にあった本文であろう。

断簡番号1は、定家本と対立することは確実である。また、独自異文も誤写とは言えない。また、本文的には平安朝に多く行われていた本文を有していることを特徴として挙げられるかと思う。

（断簡番号2）七九五番歌―七九八番歌

よのなかの人の心は、なそめの  
うつろひやさきいろにそありける  
こ、ろこそうたてにくけれそめさらは  
うつろふことを、しからましやは  
いろみえてうつろふものは世の中の  
人のこ、ろのはなにそありける

読人不知

われのみやよをうくひすとなきわかん  
人のこ、ろのはなとちりせは

二行目「いろにそありける」は、元永本・後鳥羽天皇本は「も

のにそありける」、基俊本・前田家本・伏見宮本「いろにさりける」、関戸本・公任筆本は「ものにさりける」とあるが、兼実切は定家本に一致する。

先にも述べたよう、三首目に兼実筆切は作者名を持たない。しかし、諸本こぞって小野小町の歌だと作者名が存在する。この歌は『小町集』にも見られる。誤脱の可能性も拭いきれない箇所であろう。結句「はなにそありける」は、基俊本・公任筆本・天理図書館蔵本・伏見宮本が「はなにさりけり」とあつて対立するが、定家本やその他諸本とは一致する。

四首目の結句「はなとちりせは」は、清輔本系統の寛親本が「ハナトチリセハ」とあつて一致する以外、元永本が「花とちりなむ」、定家本とその他が「花とちりなは」とあつて対立する。

(断簡番号3) 八二九番歌〜八三〇番歌

古今和歌集卷第十六 三十五首 或本三十四首

哀傷

いもうとのみまかりけるとときよめる

小野篁朝臣

なくなみたあめとふりなんわたりかわ  
みつまさりなはかへりくるまに

前太政大臣をしらかはにをくりて

けるよ、める

素性法師

ちのなみたをちてそたきつしらかはの

きみかよまてのなにこそありけれ

巻名を備える。巻第十六は定家本では「哀傷歌」とある。久曾神氏は、諸伝本の部立名を検証され、第一次本は「哀傷部」、第二次本では「哀傷」、第三次本で「哀傷歌」となったと考えられた。これに従えば、兼実筆切は第二次本の部立名を持つことになる。ただし、「三十五首 或本三十四首」とあることに注意が必要である。巻第十六は諸本三十四首なのである。ただ、唯一、巻第十六が三十五首なのは、久曾神氏が第一次本と想定した志香須賀文庫本のみである。志香須賀文庫本では、八四五番歌の後に異本歌として、

諒闇のとし冷泉院のさくらをみてよめる

尚待広井女王

こゝろなきくさきといへとあはれなりことしはさかすとも  
にかれなん

を持っていて、定家本など諸本より一首多く三十五首となる。兼実筆切も「三十五首」で、ある本に拠れば巻第十六が「三十四首」だというのだから、切斷される前はこの巻に三十五首の歌

を持っていたことはほぼ確実であろう。久曾神氏は部立名が第

二次本であることから、「第二次本に第一次本で校合が行われたのである」とされる。例えば、五行目「あめとふりなん」

は、定家本はじめ諸本が「あめとふらん」なのに對し、唯一、志香須賀文庫本が一致している点もその可能性は否定できまい（ただし、「ら」と「り」の誤写の可能性も十分に考えられる）。

ただし、先に見たように、志香須賀文庫本と対立する場合もまま見られるため、同系統とはいえない。また、今日知られないだけで、かつてはこの巻に三十五首の歌を持つ『古今和歌集』の存在も否定はできない。久曾神氏の想定する二次本以降の段階でも三十五首歌を持った本が存在していたと考えることもできらう。だがあくまで接触を経た可能性があるに留めておきたい。

従来、志香須賀文庫本のみがこの異本歌を有していたが、この兼実筆にみられる注記は、志香須賀文庫本のように巻第十六が三十五首あった本を示している。従来は志香須賀文庫本ひとり三十五首あったとみられていたが、ここに三十五首の歌を持つ『古今和歌集』がほかにも存在したことを兼実切が示していることは重要であろう。

（断簡番号4） 八八五番歌／八八七番歌

のことさもあらず□なりにけ

り 尼教信因香朝臣女

おほそらをてりゆく月しきよければ

くもかくせともひかりけなくに

題不知 読人不知

いそのかみふるからをのゝともかしは

もとのこゝろはわすられなくに

いにしへのゝなかのし水ぬるけれど

もとのこゝろをしる人そくむ

作者名については先に述べた。元永本や公任筆本に近い。

三行目「てりゆく月し」は、元永本が「てりゆく月の」、志香須賀文庫本が「てりゆく月も」とあつて対立する。志香文庫本とは「し」と「も」の誤写が考えられるが、作者名については開きがあるため区別しておきたい。先に触れた二本とは対立する。

七行目「わすられなくに」は、定家本はじめ多くの諸本が一致するが、基俊本が「わすれさりけり」、公任筆本が「なをしやすけり」とあつて対立する。広く流布していた本文を有しているのらう。また、基俊本はこの歌の後に、

又、本の人にはなほしかなとも

と唯一、左注を持つ。本文も対立し、異本歌も共有しないため、現存断簡の段階では、基俊本との関係は遠いと考えてよいように思う（久曾神氏の分類では基俊本は第一次本）。

〔断簡番号5〕 九〇二番歌～九〇三番歌

白雪のやえふりしけるかえる山

かえすくもをいにけるかな

同御時にうへのさふらひにて

おとこの御みきたまはて

御遊ありけるついでにつか

まつりける

#### 敏行朝臣

おいぬとてなとかわかみをせめきけん

おいすはけふにあはましものな

一行目「やえふりしける」は、志香須賀文庫本・公任筆本・六条家本・寛親本・前田家本・天理図書館蔵本・雅経本など「やへにかさなる」とある。やはり、先に触れた志香須賀文庫本とは対立する。久曾神氏は校合したのではと示されたが、本文の開きが大きいように思われる。あくまで校合した可能性があるに過ぎないと思うのが妥当かと思う。

二行目「かえすく」も多くの諸本と対立する。元永本は一

致しているが、四行目「御遊」は、元永本や本阿弥切・公任筆本・寛親本では「御あそひなど」とあつて、元永本とは一致しない。志香須賀文庫本でも「おほみきあそひなどとして」とあつて対立し、むしろ定家本に一致している。

九行目「あはましものな」は、諸本いずれも「あはましものか」であるので断簡の「る」と「か」の誤写と考えてよいだろう。

〔断簡番号7〕 一〇〇〇番歌

哥めしける時にたてまつる

とてとをくにかきつけてたて

まつりける 伊勢

やまかはのをとにのみきくも、しきを

みをはやなからみるよしもかな

一行目「哥めしける時」は、高野切が「うたをめしけるとき」とある以外特に異同はない。同じく「たてまつる」は諸本ほぼ一致するが、元永本のみ「献れとて」とある。

四行目「やまかはの」は、本阿弥切・寛親本・永治本・前田家本・天理図書館本・伏見宮本・雅経本などが「やまかつの」とあつて対立する。先の例から見ると、清輔本ともやや開きがあるように考えられる。

## おわりに

以上、断簡に見られる主な異同を見てきたが、どこかの系統に収まる要素が七葉に増えても詳らかにし得ない。他系統との接触は考えられるが、例えば、異本歌や左注の有無といった明確な特徴が無いというのが実情であり、その系統を絞り難い。ただし、定家本と比するに相当に特殊な本文を有していることは、まず、間違い。今後とも、ツレの出現を期して待ちたい。

以上から、特徴をまとめてみる。

①元永本に一致する特徴的な部分もあったが、本文的には多くの部分で対立がみられる。よって、元永本系統とは言えない。当時あった元永本系統とは異なる平安朝の本文の姿を留めているということであろう。

②また、志香須賀文庫本に校合されたかと思われる巻第十六があったが、その他の断簡からは大きく異同が確認され、その可能性はあくまで可能性の域を出ず、むしろ、所謂「第二次本」の段階でも三十五首持つ本も存在していたと考える方が妥当かと考えられる。

③一方、異本と対立しながら定家本に一致する場合も数例見られた。が、その場合、対立する異本は少数で、定家本だけで

はなくその他多くの平安朝に行われていた諸本の本文とも一致していた。このことを考えれば、定家本との接触によって本文が動いたというよりも、兼実筆切は（定家もおそらく特に校訂必要なしと判断した）、当時に普通に行われていた本文をそのままに残しているということだろう。

このように考えると、兼実筆切は、現存諸本の中での異同による一致するかしないかという観点では定家本に比して、特殊な本文を有しているようにみえる。しかし、写本によって本文が伝わっていく時代ゆえ、時に他本との接触も経つつも、定家本に遡る本文の姿を伝えてくれるものとして、注目すべき点が多くみられる。よって、「特殊な本文」というよりは、従来知られていた本文ともまた違う、新たな『古今和歌集』の本文を窺い知ることができる存在として位置付け、さらなるツレの博搜とその都度の整理が必要なものとして認識されるべきものであろう。

## 〔注〕

（１）小松茂美氏『古筆学大成 四』（平成元年 講談社）

（２）断簡所在は『古筆切影印解説』は注（１）を示す。『古筆学大成』は注（２）による。『国文学古筆切入門』は藤井隆・



田中登氏著『国文学古筆切入門』(昭和六十年 和泉書院)、『平成新修古筆資料集』は田中登氏編『平成新修古筆資料集 第一集』(平成十二年 思文閣出版)による。

(3) 注(2)の田中氏編著による。

(たていし だいき／大阪商業大学高等学校非常勤講師)